

〔研究紹介〕

セレベス海域の海産資源利用に対する民族考古学からのアプローチ

小野林太郎（国立民族学博物館外来研究員）

民族考古学と地域研究

恐らくこのタイトルを読まれた方々の中には、「民族考古学」という名前に耳慣れなさを感じている方も多いのではないかと思う。民族考古学とは、1960年代末に考古学の学問分野で登場したやや新しい方法論の一つである。民族考古学とは、一言で表現するなら考古学者による民族学調査ということになる。その目的は、「考古学的視点に基づく民族調査によって得られた人間の行動と物質文化との関わりに注目した民族誌データを、遺物（物質文化）を中心とする考古学データと対比させることによる考古学的解釈の拡大」にあった（e.g. Gould 1978; Kramer 1979; Stiles 1977）。

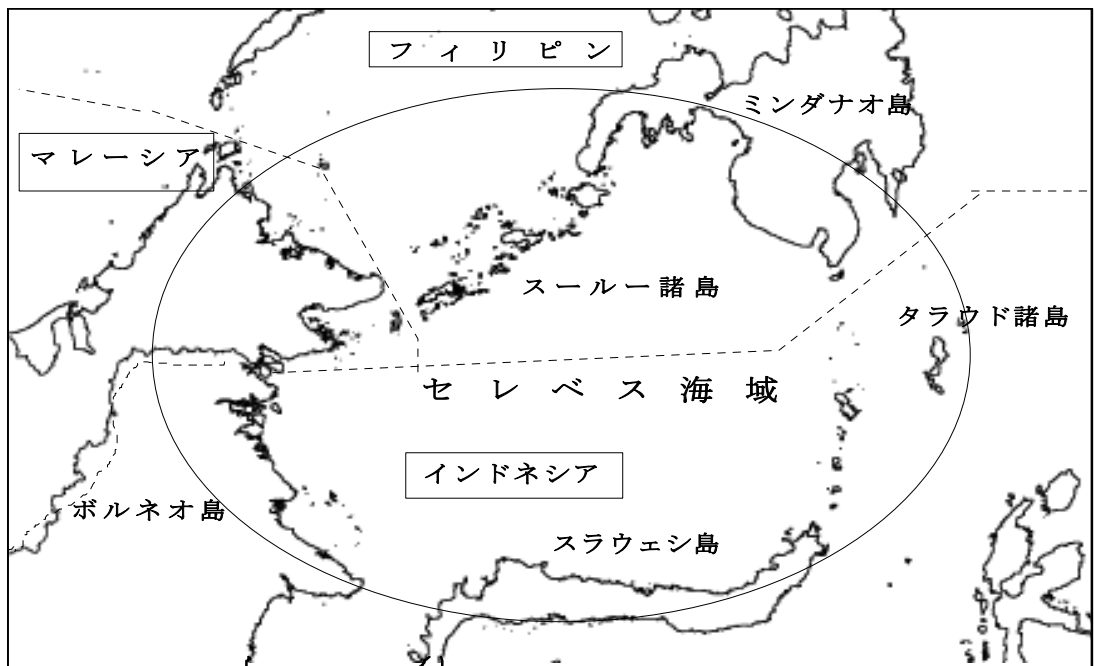
特に民族考古学の方法論によって目指された考古学的解釈の拡大とは、人間行動の実態的側面に関わる多くの情報を提供してくれる民族誌データを検討することで、過去における人間行動や社会組織、精神世界の再構築といった動態的研究を試みるものであった。しかし、その大前提となっている目的は、あくまでも「現在をして過去を語らしめる」ものであったといえる。

これに対し、私は民族考古学という方法論には、もう一つの視点からの研究も可能ではないかと考えている。それは、「過去をして現在を語らしめる」という視点である。すなわち、過去における情報を得ることができ、同時に現在を生きる人々の生き様をも見ることができる民族考古学の方法論は、過去の復元のみを目的とした考古学研究としてのみではなく、過去から現在をみるという現在を対象とした現代研究としても成立する可能性がある。この点において、私は民族考古学の方法論を利用した自分自身の研究を、現代を軸とする学際的共同研究¹として捉えられる地域研究の一環として取り組んできた。

¹ 地域研究の定義は研究者によって多種多様であるが、私自身による理解では、地域研究とは学際的研究として実践されることを大前提としている（e.g. Hall 1947; Steward, 1950）。したがって、究極的には個人研究者による地域研究は存在しない。しかし、学際的研究としての性格を有する地域研究を実践する際に、まず求められるのは、それに参加する各研究者の専門研究レベルにおける問題意識や研究成果を、いかに他の学問領域とリンクさせていくのか、という研究者個人レベルでの適応作業が求められよう。その意味では、地域研究としての最初の作業とは、各学問・専門領域内でも完結できる問題意識・研究成果を研究者レベルでいかに広げ、他の学問領域との学際的研究の一環として広げる試みが求められるのではなかろうか。

その研究地域となるフィールドが、タイトルにもある「セレベス海域」である（図 1）。「セレベス海域」とは、マレーシア、フィリピン、インドネシアという 3 カ国によって分断されている、島嶼東南アジアでも珍しい海域世界である（図版 1）。その背景には、地域を「国家」という視点だけではなく、あえて「生態」と「歴史」に着目することで「海域」という新たな視点にもとづく地域研究ができないかという試みがあった。その上でセレベス海域を捉える一つのキーワードとして、私は海産資源の利用をめぐる生業とその背後にある人々の生計戦略に注目してきた。

図版 1：セレベス海域と 3 つの国家



過去における海洋資源利用

生業を研究する上で、漁撈活動を中心とする海産資源の利用をめぐる生業にまず着目した理由は二つあった。一つは対象とする地域が、何よりも海域世界であり、海産資源の利用が歴史的に重要な位置を占めてきたとする理解である。もう一つは私が方法論として利用する民族考古学において、とくに過去を研究する際に必要となる発掘調査では、海産資源である貝殻や魚の骨といった遺物のほうが、陸産資源となる農作物などの植物遺存体よりも発掘される可能性が高いという研究上の制約である。

このような背景から私は「過去」における海産資源の利用について研究を開始した。とはいえ、たんに「過去」といっても長い人類史の中でどの時代まで遡る必要があるかを考える必要がある。それでは、セレベス海域における人々の生業を研究する上で、どの時代まで視野にいれるのが妥当であろうか？現在のセレベス海域をふくむ東南アジア島嶼域から、さらにはオセアニアまでを含む共通の言語群となるオーストロネシア語群の祖語は、近年の言語学および考古学研究によれば約 4,000 年前にあたる新石器時代に、中国の南海岸から台湾を経由して東南アジア海域世界に流入した可能性が指摘されている。その具体的な拡散の過程や内容はまだ不明な部分が多いが、現在の人々と共通する言語や文化、生業形態をもった人類集団がこの海域に入ってきた時代として、新石器時代が一つの画期となる可能性は高い。私の関心もセレベス海域の新石器時代に向かったわけである。

セレベス海域の西端にあたる現マレーシア領、サバ州東海岸に位置するセンボルナ半島の沿岸部には、ブキットテンコラック岩陰遺跡という新石器時代遺跡がある。和訳すれば「骸骨の丘」となるこの遺跡は、その名のとおり海拔 100m ほどの丘の上に形成された遺跡である。丘の頂きからはセンボルナ半島をかこむ無数の島々と広大なサンゴ礁リーフを見渡すことができる。丘の名は、1970 年代にこの丘から数体の人骨が発見されたことにちなむ。結局これらの人骨は古人骨ではなかったことが判明したが、丘の頂きに形成されている岩陰周辺には、大量の土器、石器片や動物骨が散乱されていることが確認された。このため 1980 年代末には、オーストラリア国立大学の考古学者ピーター・ベルウッドとサバ博物館によって試験的な発掘調査がおこなわれた (Bellwood 1989, 1997)。

発掘調査の結果は驚くべきものだった。遺跡の形成年代は、3,500 年前から 2,000 年前頃までの新石器時代に相当し、出土した土器は台湾から東南アジア、そしてオセアニアにかけて共通に出土する、丁寧な研磨が施された赤色の土器が主体で、文様にも周辺地域との共通性が多く見られた。さらに出土した黒曜石を対象とした産地同定の結果、その産地は遺跡から 5,000 キロ近く離れたニューギニアのニューブリテン島にあるタラセア産のものであることが判明したのである (Bellwood and Koon 1989; Chia 1997)。実はこのタラセア産の黒曜石は、ちょうど同じ頃にニューギニアの離島部からメラネシアにかけて出現し、急速に拡散したラピタ集団によっても積極的に利用された。このラピタ集団こそが、現時点では最初にメラネシアからポリネシアへと拡散したオーストロネシア語族集団と考えられており、ブキットテンコラック岩陰遺跡は、そうしたオセアニアへの移住や拡散とも何らかの関わりがあった遺跡として考古学の世界では注目を浴びることとなった。

この遺跡からは土器や石器のほか大量に出土する遺物があった。それが魚骨や貝を中心とする動物遺存体である。過去における人々の海産資源利用を検討する上で、人々がどのような種類の魚類を捕獲し、食していたかは重要な検討課題であろう。しかし、ベルウ

ッドによる発掘調査や、その後に継続されたマレーシア科学大学のステファン・チャーらによる発掘調査では、ブタやシカを主とする陸生動物の骨と貝は分析されたものの、全体の8割以上を占めていた魚骨は詳細に分析されることがなかった。

そこで私がまず取り掛かったのは、遺跡周辺での魚骨の現生標本の収集と作製であった。これは当時、マレーシア国内の研究機関には骨の同定をおこなう際に必要となる現生標本が存在しなかったためである。最終的に私は50種におよぶ200体の標本を作製し、これを用いて先行研究によって出土していた魚骨の同定を実施した(小野 2001)。また2001年にはサバ博物館、マレーシア科学大学と共同で、ブキットテンコラック遺跡での再発掘調査を実施することができ、さらに10,000点ちかい魚骨を発掘した(小野 2004)。

これらの資料をもとに同定分析をおこった結果、合計で28種におよぶ魚類が同定された。興味深いことに、これらの魚類の多くはブダイやハタ、ベラといったサンゴ礁に生息する沿岸魚であり、マグロやカツオなどの外洋魚はほとんど出土しなかった。このことは遺跡を利用した人々が、主に遺跡周辺の沿岸域に集中して漁撈活動をおこなっていた可能性を示唆している(Ono 2004)。実は同じような傾向は、同時期に形成されたオセアニアのラピタ遺跡群でも確認されており(e.g. Green 1986; Kirch 1988a, 1988b)、もっとも多く獲られていた可能性のある魚種の多くもほぼ一致していることが判明した(Ono 2002)。それではこの一致は、人々が共通した漁撈技術や嗜好性をもっていた結果なのであろうか?それとも遺跡の立地環境における共通性を反映したものであろうか?

こうした疑問に対し、まず検討すべき課題として漁撈技術の問題が挙げられるが、残念ながらブキットテンコラック遺跡からは、漁具と推定されるような遺物が発見されることがなかった。物的証拠(遺物)がない問題に対しては、ほとんど何も言えなくなってしまうのは考古学の弱点であるが、それを少しでも挽回しようとして注目されてきたのが、最初に紹介した民族考古学の方法論である。考古学の研究から出発した私も、民族考古学という方法論に着目したのは、「現在から過去を語ろう」とする視点であったことになる。

現在における海洋資源利用

ブキットテンコラック遺跡が立地する現在のセンボルナ半島とその周辺の離島域には、バジャウやサマと呼ばれる人々が多く居住している。ここでは統一してサマ人と呼ぶが、彼らはかつて海洋民や漁民として知られてきた人々でもある。現在でも遺跡周辺の海域ではサマ人が頻繁に漁撈活動をおこなっていた。近年における乱獲やダイナマイト漁などの破壊的漁業のために水産資源の量が減少傾向にはあるものの(長津 1999)、基本的な沿岸生態系は新石器時代と共通する可能性が高いこの海域でおこなわれるサマ人による漁撈活動は、遺跡から出土した魚種を漁獲するさいに利用された漁撈技術を検討する上でのヒン

トにならないか。このような問題意識から、私は遺跡周辺に点在するいくつかのサマ入村での調査を開始することになった。

サマ入村での調査は、遺跡周辺に存在するいくつかの村を対象としておこなった。複数の村を対象としたのは、村によってその立地環境や社会環境が微妙に異なっていたため、その多様性の幅を確認したいという目的があった。その結果、同じサマ入村でも漁撈活動が活発におこなわれている村もあれば、漁撈以外の生業に従事する人々が多数を占めている村も確認された。このうち考古学研究から求められていた「特定魚種の漁獲における漁撈技術や漁場空間の把握」という課題は、漁撈人口の多い村で集中的におこなった。その調査は同行と聞き込みによっておこなわれ、合計で100回以上の漁撈活動を記録している。

サマ入による漁撈活動では、主に網漁、手釣り漁、突き漁が頻繁に利用される。これらの漁法はさらに細分化されているが、漁獲対象とする魚種によって意図的に漁法が選択されていることが確認された。たとえば遺跡からの出土が多かったブダイなどは網漁での漁獲が多く、ハタやベラなどは釣り漁での漁獲が圧倒的に高い結果となった。こうした魚種と漁法の関係は、オセアニアなど他地域でも同様に見られるものである。またそれらの事例を比較してみたところ、魚種と漁法との相関性はかなりの割合で共通する傾向があることが確かめられた。このことは、両者の関係性にはある程度の普遍性が認められることを意味している。したがってサマ入の事例から得られた魚種と漁法の関係は、過去における漁撈技術を考察する上でも重要な情報となる可能性がある。

一方、漁場空間との関係においても興味深い結果が得られた。それは、サマ入の伝統的な漁撈活動と漁法が、いずれも村周辺の浅いサンゴ礁リーフ内でのみおこなわれる傾向があることである。すでに指摘したように、同じ傾向は新石器時代遺跡となるブキットテンコラック遺跡においても確認された。もちろん遺跡を残した新石器時代の人々がサマ入の直接的な祖先となる証拠は何もなく、共通の文化や社会形態を有していたとも考えられない。では両者の漁撈活動における漁場空間の一致は、何を意味するのであろうか。同じ問題は、過去におけるブキットテンコラック遺跡とオセアニアのラピタ遺跡群にみられる共通性にも問いかけられよう。私は、その答えを彼らの漁撈活動の背後にある生計戦略に求めた。

ところが、ここには大きな問題があった。サマ入は17世紀頃からこの海域に台頭してきたスールー王国の中で、王国の主要な輸出品であったナマコなどの特殊海産物の捕獲者や運び屋といった海洋民として生きてきた歴史をもっている (e.g. 床呂 1995; 長津 2004; Sather 1997)。彼らの中には家舟居住を営み、陸地には所有地をもたない人々も少なくなかった。したがって、彼らは陸上が舞台となる農業や狩猟といった生業活動は営むことがほとんどなかった集団であったことになる。生きていく上で欠かせないコメなどの主食とな

る栽培植物は、主に海産物や現金との交換で得るとというのが彼らの基本的な生計戦略だった。同時に彼らの漁撈空間を決定した背景には、重要な商品となるナマコなどの海産物がサンゴ礁リーフに多く生息してきたことが挙げられる。この性格は今でも強く残っており、村の周辺でココヤシやバナナを栽培しているサマ人はいるが、主食となるコメやキャッサバの栽培を生活の中心とするサマ人は確認することができなかった。

これに対し、ブキットテンコラック遺跡を残した新石器時代の人々は、漁撈だけでなく内陸での狩猟や採集もおこなっていたことが出土遺物から確認されている（小野 2004）。またブキットテンコラック遺跡では確認されていないが、同時期のラピタ遺跡群ではタロイモなどが主食として栽培されていた可能性が指摘されている。魚や肉などのタンパク質だけでは人間は生きていけないので、ブキットテンコラック遺跡においても主食となる植物は、栽培によって得られていたことが推測される。したがって、過去における人々の生計戦略は、その生業活動の全体から検討する必要がある。しかし、それを検討するには漁撈活動への依存が高すぎるサマ人の生業活動のみでは困難であるという結論に至ったわけである。

今後の課題と展望

ボルネオ島の東岸域でおこなった新石器時代遺跡の発掘調査と、サマ人を対象とした民族調査は大きく二つの課題を私に与えた。一つは過去を対象とする考古学研究において、いかに過去における人々の生計戦略を検討するののかという課題である。これに対し、私は民族考古学の方法論が頻繁に用いる「斉一主義的視点」からの比較による検討を試みている。斉一主義とは、自然環境などの制約を強く受ける生業活動は、類似した環境下であれば時代や集団が異なっても共通性が高いとする法則主義的な見方である。もちろん全てが共通するとは考えられないが、他地域との比較が何らかのヒントを与えてくれることは間違いない。そこで、特に新石器時代においても共通性が多く確認され、かつ生業活動の定量的なデータがそれなりに蓄積されていたオセアニアにおける事例群との比較のほか、セレベス海域の東に位置するタラウド諸島での調査を数年前より開始した。

インドネシア領に位置するタラウド諸島の人々は、現在でも半農半漁的な暮らしを営んでおり、過去における生計戦略を検討する上でも興味深いものがあった。こうした比較研究は現在も継続中であるが、オセアニアやタラウドでの生業活動には共通する点があることが明らかになってきた。それは、どんなに漁撈活動が盛んな島でも漁撈活動に費やされる時間は、主食の栽培を中心とする農耕活動に費やされる時間を越えることがないということである。つまり生業全体としては、主食を生産する農耕活動により多くの時間と労力を費やすという戦略がより一般的だったのである。この点を考慮し、改めて新石器時代に

における漁撈活動の特徴を検討すると、そこには「短時間で獲得でき、資源量も豊富な沿岸のサンゴ礁リーフでの漁撈に集中することにより、残った労働時間の多くを農耕活動に費やそう」とする生計戦略が見えてくる（小野 2005）。

しかし、こうした傾向を考古学的に証明するには、やはり農耕活動と関る植物遺存体の研究が必要となるであろう。セレベス海域をふくめた東南アジア海域世界では、まだ本格的な植物遺存体の研究がおこなわれていないが、今後の研究課題の一つとして、植物遺存体の収集と分析を目的とした考古学的な調査の実施を模索している最中である。

一方、もう一つの課題は、現代を対象とした地域研究に民族考古学というアプローチによる「過去からの視点」から、どのように貢献するのかという点にある。サマ人を対象とした調査では、漁撈活動のほかにも彼らの現在の暮らしや社会状況に関する多くのデータを得ることができた。たとえばサマ人の漁撈活動そのものをとっても、実際には陸サマと呼ばれる定住化したグループと、海サマと呼ばれる移動性の高いグループによる漁撈では、その性格が異なっていることが確認された。さらにその背後には、マレーシア国籍をもつ陸サマ系の人々と、国籍がなく不法滞在者として扱われることも多い海サマ系の人々の重層的な社会関係がみられた（小野 2006a）。こうした現代における海域世界の一側面は、考古学研究にはすぐに還元することが難しいが、現代のセレベス海域を対象とした地域研究にとっては多くの示唆を与えてくれる。

しかし、私自身が求めているのは、何よりも民族考古学というアプローチを生かし、「過去から現在をみる視点」による地域研究の実践である。これは、単純に新石器時代と現代とを比較すれば達成されるというものではない。むしろ新石器時代のみではなく、そこから現代へと至る間の歴史、特にここでは人々の生業や海産資源利用の歴史を検討することで、「過去からの視点」がより強固なものとなる可能性がないだろうか。このような問題意識から、私はセレベス海の東側に位置するスラウェシ島北部やタラウド諸島において、10世紀から18世紀頃に相当するより新しい時代の遺跡群でも発掘調査を開始した（小野 2006b）。その試みはまだ始まったばかりであるが、「過去」を追究しながら、絶えず「現在」をも目の当たりにできる民族考古学のアプローチから、今後も新しい地域研究の方向性を模索していきたいと考えている。

最初にも記したように、現在のセレベス海域は三つの国家によって分断された海域である。しかしこの海域は、私にとっては過去と現在を繋げてくれる魅力に満ちた海域でもある。さらにこの海域は、東南アジアの海域世界とオセアニアの海域世界をつなぐ海域となる可能性がある。実際、セレベス海域の東端にあるタラウド諸島のお隣はマイクロネシアのパラオ諸島である。島の人々にとってマイクロネシアの離島域は、首都のジャカルタがあるジャワ島よりもずっと身近な存在ともなっているのである。私にとって、海域世界の地域研究はいつも新たな発見と興奮に包まれている。

引用文献 (ABC 順)

Bellwood, P.

1989 Archaeological investigations at Bukit Tengkorak and Segarong, southeastern Sabah.
Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association 9: 122-162.

1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago. Revised Edition.* Hawaii: University of Hawaii Press.

Bellwood, P.S. and P. Koon.

1989 Lapita colonists leave boats unburned, *Antiquity*, 63: 613-622.

Chia, S.

1997 The Prehistory of Bukit Tengkorak as a Major Pottery Making Site in Southeast Asia.
Ph.D. Thesis. University of Sains Malaysia.

Gould, R.A. (ed)

1978 *Explanation in Ethnoarchaeology.* University of New Mexico Press.

Green, R.C.

1986 Lapita fishing: the evidence of site SE-RF-2 from the main Reef Islands, Santa Cruz group, Solomons, In A. Anderson (ed), *Traditional Fishing in the Pacific.* Pacific Anthropological Records 37: pp.19-35.

Hall, R.

1947. Area studies: with special reference to their implications for research in the social sciences. *Science Research Council.*

Kirch, P.V.

1988a *Niutopotapu: The Prehistory of a Polynesian Chieftdom.* Burke Museum.

1988b The Talepakemalai site and Oceanic prehistory, *National Geographic Research* 4: 328-342.

Kramer, C. (ed)

1979 *Ethnoarchaeology: Implication of Ethnography for Archaeology.* Columbia University Press.

長津一史

1999 「海サマとダイナマイト漁」『日本熱帯学会ニューズレター』 37

2004 「『正しい』宗教をめぐるポリテックスマレーシア・サバ州、海サマ人社会における公的イスラームの経験ー」『文化人類学』 69(1) : 45-69.

床呂郁哉

1992 「海のエスノヒストリー」『民族学研究』 57(1):1-20

小野林太郎

- 2001 「ボルネオ島東岸域における新石器時代漁労活動の特色と環境利用圏：魚骨資料の分析とセンポルナ海域での民族調査からの検討」『動物考古学』17: 1-24.
- 2004 「ボルネオ島東岸域における新石器時代遺跡の諸特徴とその系譜：遺物組成・生計戦略・立地環境からの比較と検討」『東南アジア考古学』24:19-53.
- 2005 「セレベス海域における海洋資源利用と生計戦略：民族考古学的アプローチからの地域研究の試み」 博士論文（地域研究） 上智大学大学院
- 2006a 「変わる“生計活動”と変わらぬ“資源利用”－東南アジアの「漂海民」の場合－」 印東道子編 『環境と資源利用の人類学 - 西太平洋島嶼の生活と文化 - 』pp105-126 明石書店
- 2006b 「土器・陶磁器から見たセレベス海域の交易・歴史時代：交易ネットワーク・複合社会の発展過程に関する歴史考古学的試論」『上智アジア学』23号: 179-200.

Ono, R.

- 2002 Prehistoric Austronesian fishing strategies: A comparison between Island Southeast Asia and Lapita Cultural Complex. Sand, C. (ed.) *Pacific Archaeology: Assessments and Prospects*, p.191-201.
- 2004 Prehistoric fishing at Bukit Tengkorak, east coast of Borneo Island. *New Zealand Journal of Archaeology* 24: 77-106.

Sather, C.

- 1997 *The Bajau Laut: Adaptation, History and the Fate in a Maritime Fishing Society of South-eastern Sabah*. Oxford: Oxford University Press.

Steward, J.

- 1950 Area Research, Theory and Practice. *Social Science Council Bulletin* 63: 7.

Stiles, D.

- 1977 Ethnoarchaeology: A discussion of methods and applications. *Man* 12 (1): 87-103.

小野林太郎氏は、上智大学大学院、日本学術振興会特別研究員を経て、現在は国立民族学博物館にて研究に従事されています。2006年10月には、上智大学に提出した博士論文「セレベス海域における海洋資源利用と生計戦略：民族考古学的アプローチからの地域研究の試み」により、第5回井植記念「アジア太平洋研究賞」を受賞されました。（信田）